内分泌攪乱性物質のリスクに基づく 定量的ランキングの枠組み

中西 準子

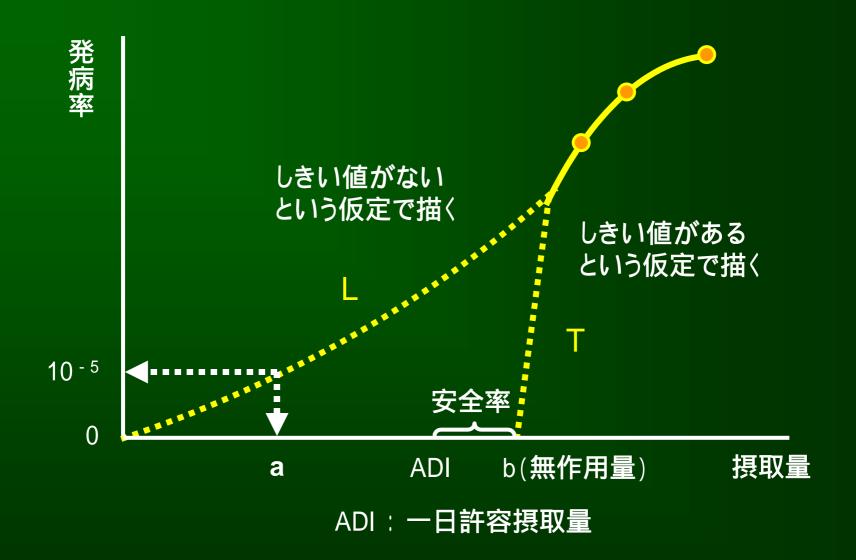
横浜国立大学環境科学研究センター 科学技術振興事業団CREST(戦略基礎研究)研究員

内分泌攪乱性物質=俗称、環境ホルモン

= 略号、EDCs

内分泌攪乱物質について、リスク評価ができないとする理由

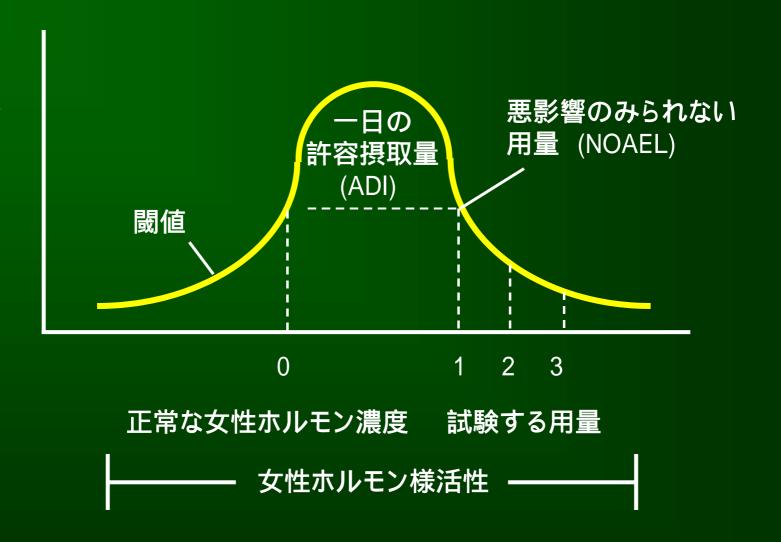
- 1.がんなどの病気と違い、人類の生存に関わることである。
- 2. ほんの少量でも影響がある。
- 3. 閾値がない。
- 4.量·反応関係がU字型である。
- 5.量・反応関係に二つのピークがある。
- 6.自然の物質は分解されるが、人工物質は分解されず、蓄 積する。
- 7. 複数のEDCsで1000倍もの相乗効果がある。
- 8.エストラジオールは輸送蛋白と結合しているが、人工物質 は遊離型で活性が高い。



「しきい値がある」と「しきい値がない」

内分泌攪乱物質について、リスク評価ができないとする理由

- 1.がんなどの病気と違い、人類の生存に関わることである。
- 2. ほんの少量でも影響がある。
- 3. 閾値がない。
- 4.量·反応関係がU字型である。
- 5.量・反応関係に二つのピークがある。
- 6.自然の物質は分解されるが、人工物質は分解されず、蓄 積する。
- 7. 複数のEDCsで1000倍もの相乗効果がある。
- 8.エストラジオールは輸送蛋白と結合しているが、人工物質 は遊離型で活性が高い。



逆U字型濃度 - 反応曲線

(VOM SAALら1997、井口ら)

内分泌攪乱物質について、リスク評価ができないとする理由

- 1.がんなどの病気と違い、人類の生存に関わることである。
- 2. ほんの少量でも影響がある。
- 3. 閾値がない。
- 4.量·反応関係がU字型である。
- 5.量・反応関係に二つのピークがある。
- 6.自然の物質は分解されるが、人工物質は分解されず、蓄 積する。
- 7. 複数のEDCsで1000倍もの相乗効果がある。
- 8.エストラジオールは輸送蛋白と結合しているが、人工物質 は遊離型で活性が高い。

リスク比較

- 1. できるだけ同類のリスクを比較する(ここでは、リスクの相対値 を使う)
- 2.同じ反応メカニズムをもつEDCsの間で比較する
- 3.最も敏感な集団の最悪のシナリオについてのリスクを比較する
- 4.相対内分泌攪乱ポテンシー、暴露量、生物体内での利用能の三要素で相対リスクを比較する
- 5. 最終的なendpointに代わるendpointを用いる。知見が増すに伴い、より最終endpointに近いendpointを用いる

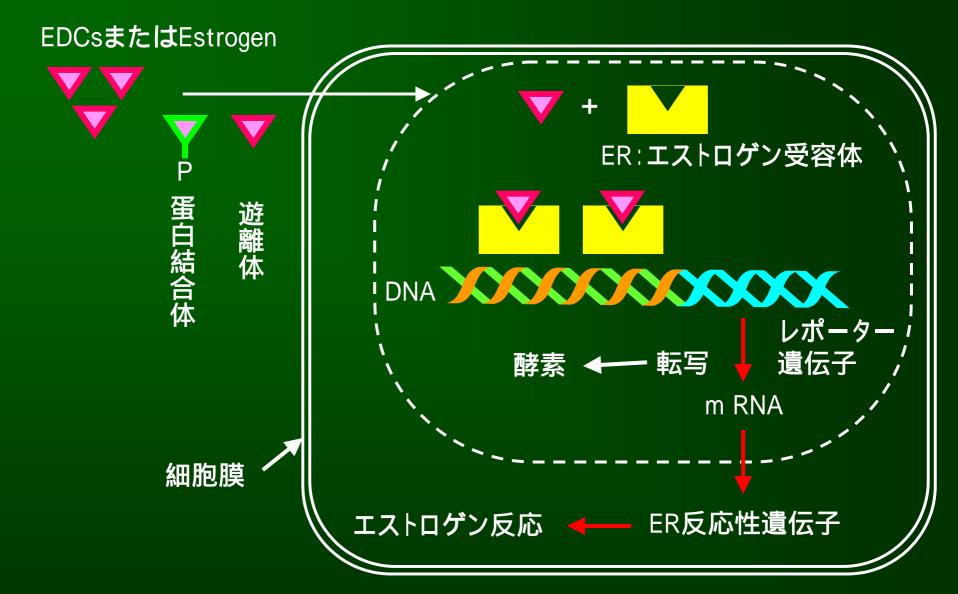
同じような研究

Safe : 相対内分泌攪乱ポテンシー、暴露量を考慮

Calabrese: 異なるendpointの知見を定量化

最終のendpoint(影響判定点)は、内分泌攪乱そのものではなく、 内分泌攪乱のメカニズムにより、引き起こされる他の結果である。 例えば、発がん、生殖や発生に対する影響である。 ここでは、生殖に与える影響を対象とする。 この観点から、EDCsを以下のように分類する。

- 1.(+)擬似エストロゲン物質(ER作用物質に重点をおく)
- 2.(-)エストロゲン阻害物質
- 3.(+)アンドロゲン阻害物質
- 4. その他
- ここで、ERはエストロゲンレセプタの略語



疑似エストロゲンの反応機構のひとつ

レセプター結合力試験: in vitro試験、ERとの結合力の試験

転写活性試験:in vitro試験、ERに結合し、転写活性を向上させる能力の試験

E-スクリーン: 女性生殖細胞での細胞増殖活性の試験

E₂ = エストラジオール

内分泌攪乱ポテンシャルを評価するための試験法の階層化

		低い	4	一 信頼度		→高い	
			試験管内試験	生体試験			
	試験 (相対	タ結合力 RBA レセプタ ペテンシー)	転写活性試験 RTA (相対転写 ポテンシー)	E - スクリーン RPP (相対増殖 ポテンシー)	子宮重量法 RUW	膣角化上	昇 生殖影響
ビスフェノー	·JレA	+	+	+	+		NOAEL=50mg/kg/da
ノニルフェノ	ール	+	+	+	+ NOAEL=30 mg/kg/day(rat)	+	NOAEL=10mg/kg/day (?) three generation test for rat
フタル酸 ブチルベン	ジル	+	+	+	-		
o,p'-DDT		+	+	+		+	+ (op'- and pp'-)
スチレンダー	イマー				_		

Characteristics about five chemicals listed are cited from Ref.

			相対エストロゲンポテンシー				
化学物質	略号	他の機能 または備考	相対レセプタ 結合ポテンシー RBA	相対転写 ポテンシー RTA	相対細胞増殖 ポテンシー RPP		
17 -エストラジオール	E ₂	Natural hormone	1	1	1		
ジエチルスチル ベストロール	DES	Synthetic hormone	2.5	0.6	10		
ノニルフェノール	NP	界面活性剤	0.0001, 0.003, 0.0005, 0.0009 0.00026	0.003, 0.0002	0.00003		

			相対エストロゲンポテンシー			
化学物質	化学物質 略号 他の機能 または備考		相対レセプタ 結合ポテンシー RBA	相対転写 ポテンシー RTA	相対細胞増殖 ポテンシー RPP	
オクチルフェノーリ	O P	界面活性剤	0.00045, 0.0006 0.0002, 0.0007 0.00072	0.001	0.0003	
ビスフェノー ル A	BPA	プラスチックス素材	0.00012, 0.0003 0.0001, 0.0001	0.00007	0.00001	
フタル酸	BBP DBP DEHP MEHP	可塑剤	<0.0005 <0.000005 not active	0.000001 <0.000001 not active	0.000003	

			相対エストロゲンポテンシー				
化学物質	略号	他の機能 または備考	相対レセプタ 結合ポテンシー RBA	相対転写 ポテンシー RTA	相対細胞増殖 ポテンシー RPP		
スチレンダイ	マー プラ	スチックス素材					
	TCBB		<0.0014				
ポリ塩化 ビフェニル	40H2'4'6'-TCB	Weak antiestroger	0.024 , 0.047	0.01	0.0001		
(PCB)	40H2'3'4'5'- PC		0.034 , 0.072		0.00001		
(. 52)	Other OH-PCB		0.001 ~ 0.05		<0.00001		
ディレドリン		 農薬 	0.00002	0.00003	0.000001		
o,p'-DDT, DI	DE DDT,DDE	p,p'-DDT is Androgen inhibitor	0.004 , 0.0001 0.0002	0.001 NM	0.000001		

			相対エストロゲンポテンシー				
化学物質	学物質 略号 他の機能 または備考		相対レセプタ 結合ポテンシー RBA	相対転写 ポテンシー RTA	相対細胞増殖 ポテンシー RPP		
トクサフェン		農薬	0.00002				
エンドスルファン		農薬 0	.00002 , <0.0001		0.000001		
メトキシクロル		農薬			0.000001		
ツェアラレノン	ZE	Weak antiestroger 植物エストロゲン	0.05	0.01	0.01		
クメストロール			0.3 , 0.1	0.01	0.00001		
ジェニステイン		Weak antiestroge 植物エストロゲン	0.3	0.1 0.000045	0.00026		

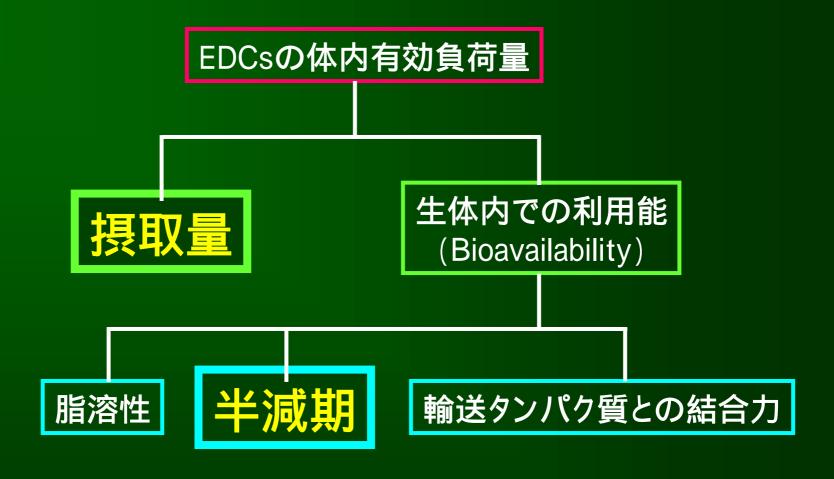
曝露シナリオ

最も敏感な集団は、胎児と新生児 最も重要な曝露経路は、母親からの移行 したがって、母親の体内のEDCsの量とポテンシーを調べる

根拠:

"これまでの環境濃度では、ひとつの化学物質が成人に影響を及ぼすことは多分ないだろう。胎児や新生児(生後1ヶ月以内)に与える影響の有無を判断するには、情報が不足している"と米国環境保護局の報告は結んでいること。

USEPA, Risk Assessment Forum, Special Report on Environmental Endocrine Disruption: An Effects Assessment and Analysis, EPA/630/R-96/012, February ,1997.



ここでは、摂取量と半減期だけを考慮して、体内負荷量を計算する

	物質	E ₂	DES	BPA	NP	Flavonoids	Genistein
仮定	1日摂取量 (mg/日) 人の体内での 半減期(日)	6 *0.56		0.006 8.75	0.1 5	1020 0.5	40 *0.5
	体内負荷量 (mg)	4.87	181	0.0761	0.72	25 739	29.0

半減期の*は、人についての実測値、無印は仮定値。

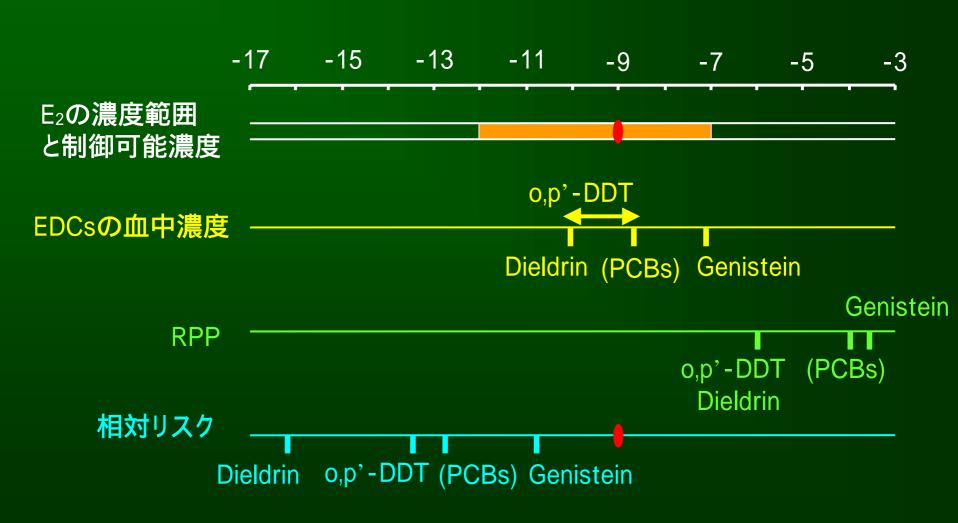
	物質	E ₂	DES	BPA	NP	Flavonoids	Genistein
仮定	RPP (相対細胞増殖 ポテンシー、 試験管内試験)	1	10	0.00001	0.00003	0.00026	0.00026
(RUW (子宮重量法での 相対ポテンシー、 生体内試験)	1	0.743	0.00005	0.00005	0.0033	0.0033
結果	相対リスク (RPPによる)	1	372	1.6 × 10 ^{- 7}	4.5 × 10 ⁻	6 0.039	1.5 × 10 ^{- 3}

相対リスク = (体内量) × (相対エストロゲンポテンシー: RPP)

E ₂	DES	BPA	NP	Flavonoids	Genistein
1	372	1.6 × 10 ^{- 7}	4.5 × 10 ^{- 6}	0.039	1.5 × 10 ^{- 3}

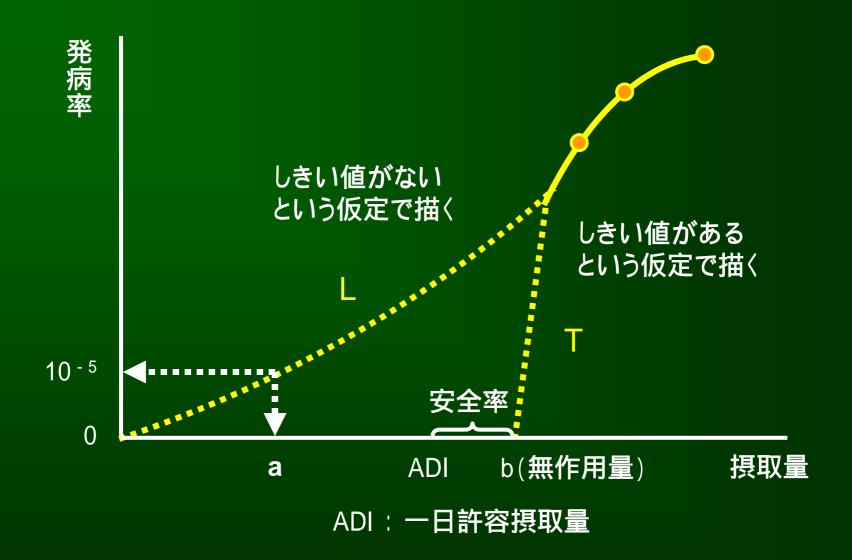


先に示した体内量より、血液中濃度を用いれば、より正確な 活性比較ができる。

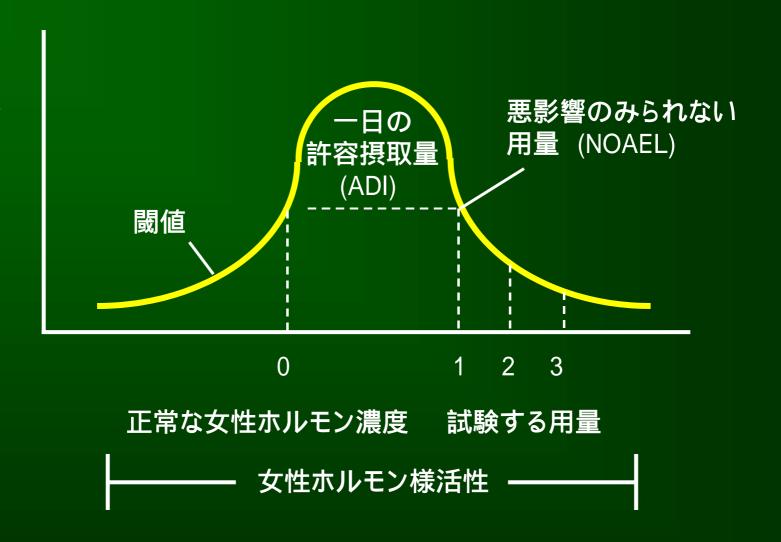


エストロゲン阻害物質についての血中濃度



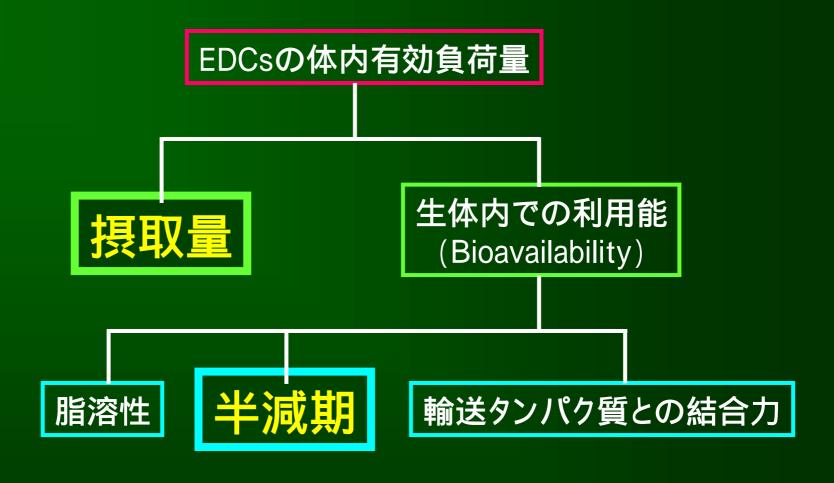


「しきい値がある」と「しきい値がない」

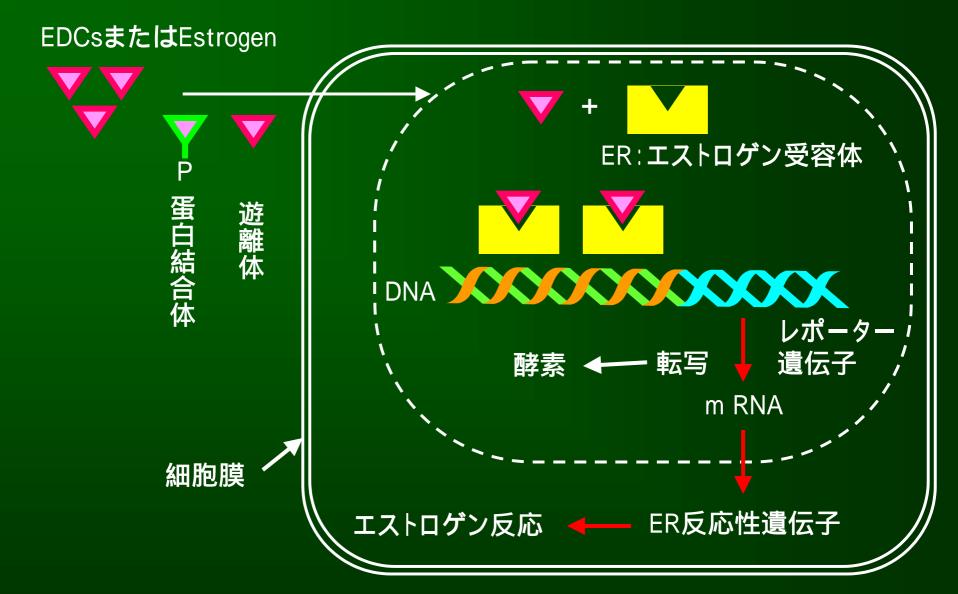


逆U字型濃度 - 反応曲線

(VOM SAALら1997、井口ら)



ここでは、摂取量と半減期だけを考慮して、体内負荷量を計算する



疑似エストロゲンの反応機構のひとつ

リスク比較の結果はどう使うか?

- 1.さらに精密な試験をするためのpriorityを決めることができる
- 2. in vitroの試験でも、大きなリスクの可能性ありと出た場合には、消費者は規制以前に使用抑制をするのがいい
- 3.ひとつひとつのリスクが小さくても、合計が大きいと判断された場合は、早めに何らかの手段をとる
- 4.今、国や国際機関が行おうとしている化学物質総点検では、 ハザード評価の方向性しかない
- 5.リスク比較をせずに、ただ、エストロゲン活性があるというだけで、禁止することは意味がない